

現代のこゝとば

こはら
小原 克博
かつひろ



ドラえもんは、二十二世紀からやってきた猫型ロボットである。作品中、のび太の教育係のような役割を負わされているが、時々、二十二世紀の未来社会が描かれることがある。そのとき、私の関心を引くのは未来社会の教育のことである。のび太の子孫は、自宅のパソコン画面で授業を受けているのだが、のび太と同様、宿題を忘れて先生に怒られている。技術は革新しても、教室の原風景は変わらないということなのだろう。

私が担当している大学の授業の一つに、今学期、千八百人の登録者があった。これほどの人数を一度に収容できる教室は存在しない。実はこのクラスは、インターネットやポッドキャストといわれる技術を使って行われ、教室をまったく使わない。二十世紀には存在しなかったタイプの授業である。

教室を使わないということ、学ぶために特定の時間に特定の場所に来なくてもよいことを意味している。つまり、好き好きに好きな場所で学ぶこと

教室の未来

ができる。「教室からの解放」である。

実際、大教室での授業は、理想的な学習環境とは言い難い場合がある。私の経験では、五百人を越えると私語を完全にやめさせるためには、かなりのエネルギーを要する。私語をやめない学生が、まじめに学ぼうとしている学生の「学ぶ権利」を侵害している状況は、決して公正なものではない。学びたい人が誰からも邪魔されずに集中でき、自分のペースで学ぶことのできる環境をつくることができないものか。そのように悩んだ末、私がかたどりに着いた一つの試みが、いくつかの先端的情報テクノロジーを組み合わせたeラーニングであった。

確かに、この授業には時間と空間に拘束されない解放感があ

るが、決して楽なものではない。なぜなら、出席確認を兼ねて、毎週、小レポートの提出を求めらなければならない。やる気のある人にとっては、毎回の学習成果を確認できる満足感があるが、そうでない人には負担感の方が大きいだろう。

また、この授業はインターネット上でオープンにしているため、卒業生や一般社会人の方からの反響もある。未来の教育の形がどのようなものになるかはわからないが、これまで教室の内部に閉ざされていた教育内容が、より広い世界に開放されていく流れは加速されていくに違いない。

教室での授業が未来社会においてなくなるとは思わない。しかし、大教室での講義は少なくなっていくだろう。その分、膝をつき合わせて親密に語り合い、学び合うことのできる時間と場所が増えていくことが望ましい。

のび太は楽をしようとして、ドラえもんは秘密の道具をねだる。しかし、その道具を正しく使わず、むしろ悪用し、結果的に苦い経験をする羽目になる。つまり、どんな便利な未来の道具があっても、それだけでは困難を解決できないことを、のび太は毎回学ぶのである。

革新的技術が教育の困難を解決してくれるのではない。しかし、道具的可能性は、さまざまに好奇心を駆り立て、新しい学びの可能性を夢見させてくれる点で、ドラえもんの四次元ポケットに似ているのである。

(同志社大教授・キリスト教思想)